

中國征服王朝の研究 上

田村實造著

昭和三十九年九月 東洋史研究會
A5判 四四四頁 圖版 四葉

本書はもちろん下巻も刊行されてはじめて完結するはずのものである。下巻が金・元兩朝に關するものであるのに對し、この上巻では遼朝を扱い、併せて、この三朝を中國史に於ける征服王朝としての書名である。それにしても、本書のばあい、第一章が上・下兩巻をおおう論述であるのを除けば、遼研究書として十分のまとまりを持つ著作ではある。それは次のような章別になっている。

序にかえて

第一章 北アジアにおける歴史世界の形成と發展

第二章 遼朝建國前のキタイ族

第三章 遼朝の成立

第四章 遼朝をめぐる國際關係

第五章 遼・宋の交通と遼朝の經濟的發達

第六章 遼朝の社會に關する研究

第七章 キタイ族の社會生活

田村教授が、その研究生活に入られるや、主としてとりくまれたのが遼朝研究であったことはいまさらいうまでもあるまい。昭和八

年、當時の東京・京都兩帝大で滿蒙文化研究のプロジェクトが企劃され、はじまつたとき、少壯研究者の一人としてそれに參加され、昭和一三年から一八年にかけて四冊刊行された「滿蒙史論叢」、その續篇的に戰後一冊だけが刊行された「東方史論叢」、その他主要な學會誌に數多く發表された論文のほとんどが、金・元兩朝史關係のものにと並び契丹・遼關係のもので文字どおり雄篇の名に價するものも少くなかつた。一方、その間、たしか三度ぐらひは内蒙・東蒙方面を踏査されており、とくに考古學の小林行雄氏と共著の報告書「慶陵」を公刊された、興安嶺中の一峯ワリーリンマンハ中腹の遼の帝陵調査は、一般の遼史研究にとつても劃期的な成果だつた。右報告書が極めて高く評價されたことも當然だつたのである。と同時に、このような現地の遺蹟あるいは景觀に親しまれた體驗が、單なる文獻操作による研究のワクを越え、著者の契丹・遼史研究に第一級としての深み厚さを加えている、というのが本書に接してあらためて印象づけられたことではある。

以下、章を逐つてその論述内容も紹介したいと思うが、著者もその「序にかえて」のなかで一々指摘されているとおり、各章節は、それぞれ曾て發表されたことのある論文がもとになっていることはたしかである。しかし、それらが昭和一〇年頃から一七七八年頃までに發表されたものといへば、既に三〇年前後むかしの作であるのに、そこで論證された諸事實がほとんど今でも改める必要のないということは、考えてみると相當なことであろう。それも今述べたようなら打ちがあればこそにちがいない。それにしても、本書の叙述ぜんたいを通じてみると、もとなつた既發表論文そのままを再録したのではなく、比べてみるとすぐわかるが補訂すべきところは

補訂し、細く意を用いて表現も變え、しばしば全面的に書き改め、新しく筆を下ろした箇所も少なくない。前作でたんねんに示された史料原文のかなりの部分を省略した代りに新しい史料を示したり、史料引用の方法も多くは讀み下し文になおされ、新時代の讀者の便宜をはかると同時に、一冊の著書としての叙述ということへの配慮がうかがえるのである。

第一章は上下兩卷を通じてこの序説ともいべきものであるが、この章については最後にふれたいと思う。

第二章は、昭和一三年に發表された「唐代契丹族の研究——特に開國傳説の成立と八部組織について——」（滿蒙史論叢一、一—八五頁）がもとであるが、本書では「遼朝建國前のキタイ族」と題名を改められているなど、學界現狀への配慮もあるうが、さらに本書を遼史叙述としてまとめようとの意圖もうかがえることとして私は受けとつた。また、章中、前作で用いられた「開國説話」という表現を「始祖説話」に改めておられるなど正しい訂正であり、このような細い配慮が以下全篇を通じて認められることをこのさい指摘しておきたい。

本章で扱われたところ、史料不足のこのテーマについて、キタイ人の間に傳承されていたと見える始祖説話——二類型がある——を通じて、歴史事實としてのキタイ族ほんらいの住地（第二節）、キタイ八部の問題（第三節）をひき出すと共に、有名な靑牛・白馬・木葉山信仰の事實とそれから始祖説話にもりこまれる過程を考えたもの（第四節）、ぜんたいとしてこの説話體系の成立時期を唐代玄宗のころ（八世紀ごろ）とされたものである。キタイ八部の問題で、遼史に傳えられる北魏時代の古八部なるものの存在を明確

に否定されたことなど、古キタイ族の問題を扱えばあい、混亂をさける指針となるだろう。なお、唐代キタイ族の族長大賀氏の世系も體系づけ、その頃のキタイ族の社會構造の分析など、はじめてのころみだったかと思われる。いずれにしろ、その頃おそらくは松井等「契丹勃興史」（滿鮮地理歴史研究報告第一）でふれられたぐらいたったところに、單なる説話研究にとどまらず、問題をさぐるうとしたものである。もちろん、その後、かなり多くの人がこの始祖説話をめぐって論議した。とくに愛宕松男氏の「契丹古代史の研究」のようなユニークな方法・考察による研究も出ているし、民族學・説話學の近年の發達した水準を顧慮しながら、一方北アジア諸族共通の問題としてさらに新しい考察を加えることはあり得よう。それにしても、遼朝前史としてこの章で述べられ指摘された論點は、今後のまず手がかりとなるはずのものである。

第三章は、第一節が「太祖の統一と迭刺部」、第二節が「太祖の建國と漢人・漢城」。唐代中期、前章で説かれた説話が固まる頃から部族連合體としての統一勢力を形成してきたキタイ族は、一〇世紀はじめ耶律阿保機が出て國家を形成することになる。その建國の過程がこの兩節でまず説かれる。阿保機の出た迭刺部の問題、彼が舊勢力としての八部を超越した存在となる過程などを分析し、彼が勢力を得るに漢人が重要な役割を演じたことをとくに注目し、諸文献により、それら漢人の主だったものの事蹟を明らかにし、關連して漢城とよばれた漢人居留城市について論ずる。以上の兩節をうけて、第三節「游牧政權から征服王朝へ」は、副題として「耶律氏政權から遼帝國への發展過程」とあるように、その過程、いわば建國戰爭期の諸事實、渤海國の併合そして東丹國の建設、燕代十六州の

領有、中原進駐などの事蹟を、太祖・太宗期を通じてたどり、中國史上の一王朝となつた遼朝が、固有文化以外に中國文化を如何に受け入れたか、早く津田左右吉「遼の制度の二重體系」（滿鮮地理歴史研究報告、五）以來注目されてきた、それまでの中國王朝に見られぬ二元的國家體制の成立を述べる。

第四章は目をそとに轉じ、遼の對外關係についての考察であるが、なかでも宋及び西夏との交渉を二節にわけて説く。宋との關係では、中心論點として澶淵の盟約を成立過程、和議條件などについて詳察を加え、それ以前と、それ以後いよいよ複雑になる遼の國際問題のなかでも比較的友好關係を維持した對宋關係を述べ、宋との友好關係が強化されることに應じ遼國內部の文化・社會が漢化しつつ發達するとの展望を與え、次章で説くところの前提を明かにする。西夏との關係については、西夏自身が東方で遼・宋、西方ではウイグル王國などにはさまれたなかで自立する過程、そのなかでとくに遼との和戰兩様の交渉の事實を明らかにする。通じて、遼・西夏という結びつきぐあい、宋朝に對してもその他近邊の少數諸族に對しても大きくものをいっていたこと、著者はとくにそのような主張をあらためて文字にしているわけではないが、そのような情勢が浮きぼりにされている。なお、遼にとってはさらに東方の女眞や高麗、北方西方のトルコ系諸族、高昌・甘州のウイグル王國などとの交渉も問題となるところであるが、それらについても曾て論述されたことがあつたが（「慶陵」I、第六章、第三節）、本書では省略されている。

第五章は第四章を受けての問題分析といえよう。三節にわけられ、第一節で遼・宋間の交通路と相互の使節往來の實態を明かに

し、第二節で兩國間の公私の貿易状況を、前章と關連するが澶淵の境とする發展を念頭に置きながら分析し、加えて大規模な歲幣・禮物・賜與の實狀を通じ、遼朝としては如何に多くの金品を入手したかを論證する。第三節で、その結果遼國內の經濟が發展したことを説くが、そこでは、こんどは國內の交通路の發達ぶり、それぞれの交通路の具體像、錢貨の流通狀況とくに宋貨が非常に多く流通していたことなどが論證されている。第四・第五の兩章を通じて、新しく生れた國家が統一國家として國礎も確立したことを、交通路の整備發達、經濟的基盤の充實していたことなどの實態を詳細に實證して確認されているのである。

第六章こそ、これまでその經過をたどってきた統一國家の確立、そこで確立された國家がすなわち征服王朝としての遼朝であり、その征服王朝ととくに銘うたれる特徴的な國家社會の構成を論じたものである。といへば、それが、いわゆる北族固有のものゝ漢族傳統的なものとの二重體系が制度面に見られ、その現象をささえる國家社會の分析でなくてはならぬわけで、著者も、まさにその觀點からこの問題をとり上げ、第一に徙民政策と州縣設置の事實に注目されたのである。それが、「徙民政策と州縣制の成立」と題し第一節に置かれたもので、論述するところ、遼朝歷代、とくに太祖・太宗時代の漢人・渤海人など定着生活になじんでいたものの遼國內への被強制移住者、亡命者などの實態、彼らによる州縣設置の事情、そしてそのような州縣の行政的とり扱い、さらに多様な成立過程による類別——頭下州・軍、幹魯桑所屬州・縣、奉陵邑、南樞密院所屬州縣——などであるが、加えて、やがてそれらが中央政府、南樞密院下に統一されてゆく過程を説き歴史の推移の考察も忘れていない。

第二節「都市の成立と性格」も右の州縣成立と同じ問題として、遼國內の代表的都市と考えられる五京それぞれの都制、住民構成を詳しく分析し、加えて、この五京に政治都市、軍事都市などの性格上の相異があることを論ずる。

この兩節のもとになったのは昭和一五年に發表された「遼代に於ける徙民政策と都市・州縣制の成立」(滿蒙史論叢Ⅲ)が中核であるが、著者はそれ以前、昭和一二年、東洋史談話會で口頭報告しておられ(東洋史研究三の二、七一頁参照)その頃活潑化していた、モングルにも共通の頭下、投下の問題(安部健夫「元代投下語源考」東洋史研究三の六、小林高四郎「元代の投下の意義について」善隣協會調査月報六九、村上正二「元朝に於ける投下の意義」蒙古學報一、島田正郎「遼の頭下州に對する二三の臆測」歴史學研究九の九など)に遼關係では整理された資料を提供し問題點を明かにされたものだった。オルダについても古く筋内互博士がふれられ(「元朝斡耳架考」第五節、東洋學報一〇の三)て以來はじめて、個々について詳細にされたものであるが、原論文では各頭下州・軍、オルダ所屬の州縣について一々考證されたところを本書ではただ表示にとどめてある。またそれらの州縣に關連しての徙民政策ということ、それも遅れて島田正郎氏などの論議も見られた(「遼の徙民政策に就いての一私見」史學雜誌五三の二、なお歴史學研究九の五・六、一七四頁参照)が、さらに、金・元・清朝などについても、それらの王朝の漢人統治策の問題として、その後、著者がここで實證されたことは参照されねばならなかった。著者みずから述べられたことだが(「序にかえて」五・六頁)、これらいわゆる征服王朝の行政的・二重體系を必要とした、その國家社會の具體像が當時としては

じめて明確にされたものである。なお、最後に第三節として「遼代佛教の社會史的考察」を加えられてあるが、佛教寺院が都市と切り離せないものという意味で本章に含まれたものだろう。五京それぞれに建置されていたと思われる佛寺、それらの寺院の施主を各種史料により檢索考證しまとめてある。

終章、第七章のうち、その第一節「遼朝の部族制」はまさに前章で説かれた州縣制と對比され、その二元的國家社會のもう一方のもの、ほんらいのキタイ人など牧民部族の統治行政の問題である。これについては單にキタイ人・遼朝のみならず、その他の北族國家・王朝に於いても同じ問題が存在するが、ここで遼朝のそれについての基本的な實態が整理してまとめられてある。皇族などの配下にある帳族とその他一般部族とに大別し、それぞれの成立の事情、編成などが説かれる。第二部「キタイ族の生活様式」で住居・食物、そしてその生活と切り離せない狩獵・漁撈の實態を、第三節では頭髪・冠りもの・服飾などについて文獻と遺物から資料を涉獵して論證、その特異な頭髪様式などいろいろ誤解のあったところについて明確化されたものである。

以上、はじめにも述べたように各章節ほとんど既發表の論文がもとになっているが、それぞれの論點はいずれも重要な問題であり、諸事實の立證過程など、とうてい一々批評紹介できるものではない。

ところで、私がかねてから遼史研究の面白さというものを想像していた。中國正史としては「遼史」の評判は必ずしも良くないが、それを補う各種史書がある。「長編」のごとき大きなものも大いに用い得ると同時に、私人の行紀類も、このような小王朝のわりには

比較的多いし、史料條件は錯綜しているが、それだけに解きほぐす面白さがあるだろう。加えて、この王朝あるいは王朝成立以前をふくめても、その領域は一時わが國の最も活潑な研究フィールドになつており、そのなかには考古・歴史的研究もふくまれ、文字どおり世界の學界に誇り得る成果をあげている。それが利用できるという何よりの強味があると。またこういう考えも持っていた。すなわち、日本の東洋史研究のなかでも、遼史研究などは最も本格的なものであるはなからうかと。それは、右のような史料條件、とくに現地での調査研究の成果が多く日本人の手中にあるという事實で裏づけられていた。しかも、その時代は考古學からいっても歴史時代考古學に屬するものだし、土中の遺物のみならず地表の遺蹟が、今にそのまま傳えられている。地理考察にしても、現在の景觀、河川・道路がほとんどそのまま當時の歴史にあてはまるのである。單に文獻だけで考察せねばならぬ時代あるいは地域とは異り、いわば國史研究にも比すべき具體性を以て、この遼史は考えることができそうだからである。

今回この著述に接し、まず、はじめの、面白そうだ、などということ、これはうっかり口にはできぬとあらためて思い知らされた。個々の論文で拜見したときも思わぬではなかったが、このようにそれを積み重ねられ、しかも一貫した展望を興えられてみると、各種文獻史料を涉獵し考證し、遺蹟遺物についても配慮し論證してゆくのは並たいていのことではないということである。しかし、日本の遼史研究の高い水準については、まさにそのとおりであることを再確認したのも事實である。

思えば、著者などがその中心的役割を演じておられたわけで、は

じめにもちよつとふれたが、數回の現地踏査あるいは遺蹟調査の經驗成果を自身の手に持っていることが、單に机上だけで考察するものとは異なる、事實認識に對する自信がうかがえるのである。どちらかといえば淡々とした行論の間に、何よりも、そのような自信に對する頼もしさを私は感じた。本書中でも、とくに論點が歴史地理學的分析に關連してくると、そのことは明瞭である。阿保機の建國の語に出てくる漢城・鹽池などの問題（二一九—二二六頁）、遼・宋間（二二九—二三六頁）や遼國內（二四九—二五六頁）の交通路の問題、奉陵邑としての州縣（二九三—三〇〇頁）や五京（三一五—三五四頁）あるいは諸都市の佛寺の問題（三五七—三六二頁）など、すべて地圖・寫眞なども附載されての論述である。それらは、その前の「滿洲歴史地理」「滿鮮歴史地理研究報告」時代ともいふべき松井等・津田左右吉あるいは鳥居龍造諸氏の開拓されたところを受けついだものでもあるが、一段と高められた水準にあることは疑ない。

とにかく、このようにして著者が多大の勞力を費して基礎的諸事實を解明され、キタイ族・遼朝史研究に盡された業績を本書に見ることができ、それが既發表の論文を集めた單なる論文集でないことを忘れてはならぬ。遼朝建國前の部族社會時代にはじまり、阿保機の擡頭そして統一國家の建設過程、國礎の確立、續いて確立された征服王朝としての遼の國家社會の構造をと、章を逐つて論じ、説かれたことは、下巻に收められるはずの金・元兩朝關係と併せ、それこそ書名とされた、中國征服王朝の研究、という大きな問題解明を意圖されたからこそであろう。その意圖・成果に關しては、兩卷揃ったときはじめて評價されるべきだろうが、ただ、本書冒頭の

第一章「北アジアに於ける歴史世界の形成と發展」は、兩巻を通じての序章とも見られるもので、そこには、著者の遼東研究から中國征服王朝研究へと問題を擴げたというか深めたというか、問題意識發展のあらわれが見られるわけである。

第一章は次の四節にわけられている。「北アジア文化圏と東アジア文化圏」「北アジアに於ける歴史世界の形成」「北アジア世界の歴史的發展」「遊牧國家と征服王朝の歴史的性格」。この四節を通じての主張は、中國に於ける征服王朝の成立を、まず北アジア歴史世界というものを確認すること、その上ではじめてそれと對抗的存在の、南方の中國農耕社會との關係を考えるべきだということ。第二に、遼・金・元などの征服王朝の出現という現象は北アジア歴史世界そのものの特定の發展段階に應じたものとして考える、すなわち、そこに北アジア歴史世界に於ける時代區分が設定できるとすることである。

本章のもととなった論文は、昭和三十一年に刊行された「北アジアにおける歴史世界の形成」（ハーバード・燕京・同志社東方文化講座第十輯）だが、その前の「東方史の構造とその展開」（史林三三二の二）、「北アジア世界に於ける國家の類型」（京都大學文學部創立五十周年記念論文集）などとつながるものだった。それらを通じての著者の主張には私などははじめから大きな關心を持ち啓蒙を受けたもので、私なりに折にふれ論じてみたこともあるし細部で相異なる點なくもないがいまは省略する（「ユーラシア遊牧民族の世界」東洋經濟新報社「世界史講座」二、江上波夫編「北アジア史」第二章「遊牧社會の發展」、第四章「草原の封建制」參照）。いずれにしても、著者の説かれるところ、歴史世界の設定については、たとえば

モンゴリア中心に「北アジア歴史世界」と表現されるそのばあい、それと西方ジュンガリアとくにカザクスタン以西とのつながりはどう考えるかなど、一つの大きな疑問ではあるが、基本的には私は賛成である。古く白鳥庫吉博士などが、いわば南北對抗史觀を打ち出し、極東史の理解に新生面を與えたが、なお中國史の問題中心という感はぬぐえぬものがあつた。それをいま一步ぬき出ねば南北對抗關係も正當には把握できぬはずである。著者のそのような基本的姿勢こそ、征服王朝の問題についても正しい問題設定を可能にしたと評價したい。それがまた、著者がここで説かれた第二の論點、歴史考察としては基本的な、時代的發展という問題意識にもつながり得たのである。ただ、この北アジア世界の歴史的發展についても、たとえば、匈奴王國からウイグル王國まで「氏族共同體的構造が温存され」ている「氏族制にもとづく部族國家あるいは部族連合體的國家」（五三頁）——この氏族の文字は民族とミスプリントされている——と一括されているところは今後の課題かと思われる。また、キタイ以降について征服王朝としての遼・金・元・清については説かれたが、北アジア世界としてはモンゴリア・ジュンガリア内部の草原社會についての指摘ももう少し欲しかった。それにしても基本的には、ウイグル王國以前を古代、キタイ以降を中世とされた認識そのものにはやはり私は賛成する。

たしかに、著者自身により、キタイ部族社會から統一國家へ、さらに中國史上の王朝へというすじ道は、本書にもられた實證的分析により明かにされた。部族社會、統一的牧民國家、征服王朝、それぞれの社會關係・社會構造の分析なども、本書のもととなった諸論文の發表された頃からいよいよ多くの人の關心をひくようになった

はずである。しかし、それはただキタイ・遼研究だけでなく、滿洲族、モンゴル族、あるいは西方でのトルコ族などのばあいと併せ比較考察することがどうしても必要となる。これは學界全體の課題であるが、そのときには前提として大きな視野が求められるので、それにこたえたのがこの第一章にはかならない。ともすれば無思想性を云々されがちなわが國の東洋史學界、ましてや北アジア史學界にとつて、實證で裏づけられた田村教授のこのような視野は、後進の者にとつては大きな指針となるものである。(山田 信夫)

中國古代帝國の形成

——特にその成立の基礎條件——

木村 正雄 著

昭和四十年三月 不昧
堂書店 A5判 八二七頁

ともかくたいへんなポリウムである。秦漢史の研究はここ數年の間に、ちよつと思いつくだけでも増淵、栗原、金谷、西嶋、平中、佐藤、鎌田ら諸氏のいずれおとらぬ大冊をえたが、本書はそれらをぬく超大作である。なにはともあれ中國古代史研究にとつて、慶賀のいたりといわねばなるまい。しかもこれらはいずれも概説風のものではなく、テーマを特殊問題にしぼった専門研究である。まえまえからそうであったが、秦漢史の研究はますます微細精緻の度を加えつつある。

ところでこの本の書評は、正直にいつて、われながら不満足なも

のになりそうである。理由は二つあって、その第一は、本書の主體をなす歴史地理學的研究にまったく齒がたたないことである。第二にこれまでのばあいは、西嶋氏にしても増淵氏にしても、日ごろから親交をめぐまれて、著者のものの考え方が、ある程度わかっていた。だから讀みの浅い点たりない点は、行間から補うこともできた。ところが木村氏のばあいそうはいかない。というわけで本書の書評は、ただ活字ずらをおつて、得た感想をつらねるに止まるとおもう。この點はあらかじめ著者および讀者の方々におわびしておきたい。

さて本書は四つの章からなり、第一章は「總論」である。この章はさきに「歴史學研究」第二一七號に發表された「中國古代專制主義とその基礎」を大幅に加筆補正されたものであるが、主要な論旨はかわっていないようだ。著者がここで明らかにしている中國古代史研究の構造は、およそつぎのようなものである。

秦漢帝國すなわち中國古代專制主義を、個人身的支配とみる西嶋氏らの説は正しい。「然しこの説が十分納得されるためには、このような直接個人的人身支配(論文では以後人頭的支配とよばれているが、本書では「齊民制」と名づけられている——河地)が、如何にして成立し、何によつて支えられていたかを、もっと明確に説明する必要がある(前掲論文、一一頁)。これがまず第一の問題設定であった。著者はこの問題を真正直に正面から受けとめ積極的に解答しようと試みる。いったい專制君主が萬民を一元的、個人身的に支配する關係、それが秦漢帝國の基本構造であるとする考え方は、マルクス主義歴史學の常識——國家權力は支配階級の階級支配を維持強化するための權力裝置であるとする定説から、大きく逸